

# 戸板女子短期大学初年次教育における言語教育のための基礎調査

村木 桂子

総合教養センター

## 1. はじめに

前期授業を担当して感じたことは、準備した授業内容が本学学生の日本語運用能力向上に役立っているのかどうかということである。日本語にかかわる教科を主に担当しているが、授業者側だけが準備してきたものをこなすことに満足感を覚えているのであって、目の前の学生一人ひとりの課題によく向き合っていないのではないかと感じた。学生と触れ合う場で個別に話したり、文章作成指導を行ったりしながら、そうした疑問が生じてきた。

筆者の役割は、本学学生の日本語運用能力向上のために力を注ぐことであり、一人でも多くの学生から学ぶことへの興味・関心を引き出すことにある。本学で学び育った学生がどのように実社会で受け取られる傾向にあるのか、現場の声をアンケートによって確認することで、本稿は「短期大学初年次教育における言語教育」という観点から、本学学生により適した授業のありかたを模索する材料とするものである。

## I. 戸板女子短期大学の教育

### 1. 建学の精神

「本学の建学の精神は、時代に適応する実学の教授研究により、職業に必要な能力を育成する<sup>①</sup>とともに、知性と品性を涵養し、女性の人格形成と自立を目指す<sup>②</sup>ことにある。」

(下線と数字は引用者)

本学の建学の精神についてさまざまな解釈があると思うが、ここではひとまず実践力を重視する<sup>①</sup>

“職業教育”、そして質の高い職業人を養成するための②“人格教育”、便宜上この二点に整理することにしたい。

戸板女子短期大学が発足したのは1950(昭和25)年であるが、当時から職業生活を営むための技能教育のみに偏重することなく、基礎教養教育も重視していたことがわかる。変化する状況のなかで知識・技能と教養を結びつけ課題解決につなげるという総合的な力は、現代のグローバル社会には必要不可欠な力であり、このことに半世紀以上前から重きが置かれていたということは注目に値する<sup>1</sup>。

では実際に、この建学の精神が具体的にどのような形で実現されようとしているのか、本学のカリキュラムと筆者のかかわる授業によって確認する。

## 2. 戸板女子短期大学のカリキュラム

本学の「履修要項」にはカリキュラムポリシーがどのようにアドミッションポリシー、ディプロマポリシーと関連をもって存在するのか、学科ごとに文章記載とは別に表になって提示されている。さらに科目間の関連や科目の配置を、ナンバリングとカラーリングによって示したカリキュラムマップが、本学のカリキュラム体系をわかりやすく表している。これによれば、就職に直結した知識や技術を身につけられる専門教育科目と同時に、自ら考え行動する力やコミュニケーション能力などの「社会人基礎力」を養い、教養やビジネスマナーも学修できる総合教養科目およびキャリア教育科目が、体系的に編成されていることがわかる。専門的な知識・技術と、教

<sup>1</sup>「戸板女子短期大学」の校名は創立者戸板関子に由来しており「戸板裁縫学校」として設立したのは1902(明治35)年のことである。教育者戸板関子としての眼目は裁縫という実践的なものを通した女子の人格形成にあったため、普遍性があるのは当然といえるかもしれない。

養を併せ持つ人材を育成するという、バランスのとれた①職業教育と②人格教育の建学の精神がここから伺うことができる。

### 3. 筆者の授業

このようなカリキュラムポリシーのなか、筆者は総合教養科目で基礎教育と人文教育にかかわる科目を担当している。なかでも「日本語コミュニケーション」の科目においては①職業教育②人格教育の二点を意識し、①では社会で活用できる日本語の力の習得を、②においては教養としての日本語を身につけるという2つのテーマのもと15回のシラバスを組み立て、実践した。

15回授業のうち前半と後半に分け大きく全体で①人格教育から②職業教育へという流れを作った。受講生全員が初年次生という前提のもと、高等教育の90分授業に慣れていない学生を想定し、中等教育の授業からの緩やかな移行として、人に伝わる話しかた、手紙やメールの表記のしかた、敬語や言葉遣いなど取り組みやすい基礎教養的な内容を前半とし、後半に実社会に通用する文章の書きかたとして、説明のしかた、案内のしかた、根拠ある意見の述べかたなどを配置した。

しかし課程を終えた履修者数人と個別で話しをしてみたところ、既に教えたはずの内容に対する質問が繰り返されるなど、授業の手ごたえを感じられなかった。筆者自身これが初めての授業実践ではなく、非常勤務先の四年制女子大学で同様の授業内容を4年間、修正を重ねながら行ってきた。複数の他大学において、学生の提出物からその成長を感じていたため本学でも同じ素材で臨んだのであるが、学生の提出物を見て感じたことは、より適したアプローチの必要性である。

大学と短期大学ではまず科目にかける時間が異なる。大学1科目あたりの授業数は30回、本学は15回である。また他大学では2年、3年、4年次生が受講生であったのに対し、本学は全員が初年次生であった。こうした違いを考慮し、説明や図解を増やすなどの変更を加えながら授業に臨んだつもりであったが、そうした調整だけでは解決できないことを感じたのである。

①職業教育、②人格教育の軸はそのままに、本学学生にとってより有効な授業となるよう改善をはかりたいと考え、まず現状を把握することからはじめることにした。本学学生はどのような日本語運用能力を身につけるべきなのか、実社会からはどのように受け取られ、また期待される傾向にあるのか、言語面に焦点を当てアンケート調査を行った。

## II. アンケート調査

### 1. 研究目的

学生がその専門分野に進むための基礎教育としてだけでなく、社会へ出てからも広く有益となる日本語能力を身につけるため、本学の建学の精神の2つの要素（①職業教育、②人格教育）を生かした初年次教育における言語教育を考えるための基礎調査である。

学生が自分の将来、仕事、成長といったことに主体的に向き合う力を育むため、それぞれの進路の先にある社会生活で必要となる考え方や、能力の基盤づくりとなる授業を模索するための素材とする。

### 2. 研究計画・方法

- (1) 本学キャリアセンターに協力を仰ぎ、研究対象は本学に求人のため来訪した（求人票を送付した）企業の人事担当者、またこれまでに本学学生を採用してきた、本学とかわりの深い企業・施設等の人事担当者とする。
- (2) 本学に来訪の機会がある企業の人事担当者には対面式のインタビュー調査を行う。対面式が困難な企業の場合にはアンケート調査票を送付し、協力が得られれば回答を得る。
- (3) インタビュー、アンケート調査票は同一のものを使用し、インタビュー時には回答者に向けて内容を読みあげ、その回答を筆記するかたちをとる。
- (4) 整理した内容をふまえ考察し、今後の教育活動に生かす道を模索する。

### 3. 調査結果

回収できたアンケート結果は一般企業28社、保育所が9園であった。一般企業と保育所ではその社会

的役割、経営目標が異なるため、今回は一般企業の28社に絞って整理する。

以下は質問5項目と、その結果をまとめたものである。

質問1. 社会人としての言語活動は、実際どのようなものが多いですか。上位3つを挙げてください。

回答結果 (表1)

順位	内容	回答数
1位	対人コミュニケーション	31
2位	メール	25
3位	電話	16

筆者はオンライン上のやり取りが最多であろうと予測したが、「対人コミュニケーション」が一位であった。パソコン作業が仕事の大半を占める社会状況のなかにあっても、大勢で一つの目的(利益を上げること)のためにさまざまな部署に分かれて働くとなると、その間をつなぐ人とかかわりは無くてはならないものとなるのだろう。日本語能力としては「話し言葉」がメインになる。また、言葉以外にも表情や雰囲気、話す速度なども、対人コミュニケーションでは重要視される要素である<sup>2</sup>。

質問2. 最初にインターンシップ等で短期大学生と出会ったときに「社会人として働くうえで欠けている」と感じられるコミュニケーション上の言語能力はどのようなものでしょうか。以下の選択肢から、特に不足を感じることを「話す・聞く」「読む・書く」それぞれについて上位3つ(選びきれない場合は4つ)ずつ、○をつけてください。

回答結果

「話す・聞く」(表2)

順位	内容	回答数
1位	情報を整理し簡潔に述べる力(例: 報告する際、時系列で話すため時間がかかる)	23
2位	言い換える力(例: 相手がわかりにくそうにしていると感じて、同じ表現を繰り返すことしかできない)	17
3位	TPOをわきまえた言葉を選び、使用する力	16

「読む・書く」(表3)

順位	内容	回答数
1位	要約する力(例: 報告書を書く際、要点を絞って書くことができない)	20
2位	話し言葉と書き言葉を区別する力(例: ビジネス文書にふさわしくない表現を書く)	16
3位	文字情報を的確に受け取り、処理する力(例: 読後返信するよう指示をしても返信がない、返信の際に名乗りがない)	13

短期大学生に対して不足を感じる言語能力は、整理したりまとめたりする力だと感じる社会人が多いという結果であった。整理やまとめには知識や技術も必要だが、数をこなすうちに上達するという点から経験も大切な要素となる。「言い換える力」(「話す・聞く」2位)や「話し言葉と書き言葉を区別する力」(「読む・書く」2位)、「TPOをわきまえた言葉を選び、使用する力」(「話す・聞く」3位)も同様に経験が必要だろう。「文字情報を的確に受け取り、処理する力」(「読む・書く」3位)は与えられた問いに正しく答えられない学生が多い、ということがわかる結果である。

質問3. 社会人として働くうえで、特に重要な「話す・聞く」力、「読む・書く」力は何でしょうか。それぞれについて上位3つ(選びきれない場合は4つ)ずつ、前ページの選択肢にアンダーラインを引いてください。

回答結果

「話す・聞く」(表4)

順位	内容	回答数
1位	情報を整理し簡潔に述べる力(例: 報告する際、時系列で話すため時間がかかる)	22
2位	表情・姿勢・態度(例: 人の目を見て話すことができない、スマートフォンをいつも見ている、人が話しているときでも平気で別の人と話をする、人に聞こえないような音量で話す)	17
3位	TPOをわきまえた言葉を選び、使用する力	16

<sup>2</sup>メラビアン(Albert Mehrabian 1939～、アメリカ、心理学者)によれば、人が直接顔を合わせるコミュニケーションには基本的に言語情報、聴覚情報、視覚情報の3つの要素が影響を及ぼすという。

「読む・書く」(表5)

順位	内容	回答数
1位	要約する力(例: 報告書を書く際、要点を絞って書くことができない)	19
2位	文字情報を的確に受け取り、処理する力(例: 読後返信するよう指示をしても返信がない、返信の際に名乗りがない)	15
3位	自分で書いた文章を読み直し、訂正する力(例: 間違いに自分で気づき、直すことができない)	13

問2は「学生として」だが、問3は「社会人として」の視点から捉えた設問である。「学生だから」と許されてきたことも、社会人となればそうはゆかない。その違いは「話す・聞く」では「表情・姿勢・態度」に、「読む・書く」では「自分で書いた文章を読み直し、訂正する力」に出たという今回の結果であった。こうした他者配慮、「少し気をつければ誰にでもできること」を大切にできるかどうか、実社会で活動する場合肝心なのだろう。社会人として信頼を得られるかどうか、良好なコミュニケーションを構築できるかどうかにかかわってくることもしれない。

質問4. 社会人としての言語活動において気になる点(言葉遣いや表現のしかたなど)があった場合、注意を促しますか。促すとしたら、どのような方法で行いますか。

回答結果(表6)

内容	回答数
促す	21
促さない <sup>3</sup>	3
無回答	4

〔注意を促すと回答した場合、その方法〕

(自由記述)(表7)

内容	回答数
気になる点があった時その場で直接注意する	9
○人前ではなく、一人になったときに、「相手の気持ちを考えて、どう思う？」という聞き方で注意を促す	3
正しい言葉遣いや表現を「○○ですね」と確認するかたちで注意する	2
○なぜその言葉遣いがまずいのか、考えさせる	1
一方的な感情ではなく、注意する相手をよく見てその人に合わせたかたちでまず聞き、それからなぜいけないか話す	1
何がどうよくないのか、どうしたらいいのか指導する	1
○言葉遣いについて考えさせるコミュニケーションをとってから、日ごろの振る舞いで間違っている点があることを自覚させるようにする	1
○何がどうよくないのか、本人自ら気づくように、話をしながら気づかせる	1
○気になる点を挙げ、その点をどう感じるのか質問し、こちらが感じているその「差」について考えてもらう。今後どうするのがベストか相談する	1
今の表現では自分はこう思ったと伝え、他の人の場合でもこう思う人は多くいるから、こういう言い方・表現をしたほうがいいことを伝える	1
計	21

ほとんどが注意を促すという回答であり、その方法は「気になる点があった時その場で直接注意する」が最多(9名)であった(回答者内訳: 25~29歳3名、30~34歳2名、35~39歳1名、45~49歳1名、50~54歳1名、55~59歳1名)。

このほか、言葉遣いを間違えたその人自身に「相手の立場に立ってどう思うか」「本人に考えさせる」「自ら気づかせる」という、自ら考え答えを見つけ出させるという注意の促し方(○印)があった。(回答者内訳: 25~29歳4名、30~34歳1名、40~44歳1名、60~65歳1名)。

後者のうち「60~65歳1名」の社内教育の専門職を除けば、比較的若い世代に「すぐ結論を言わず、当人に考えさせる」という導き方が多いことが特徴としてみられた。

<sup>3</sup>「促さない」と回答した3名の内訳は、勤務年数1年未満の一般社員(25~29歳・男性)、勤務年数4~6年の一般社員(25~29歳・女性)、勤務年数10~14年の一般社員(35~39歳・男性)というものであった。

質問 5. 言葉について、社会人になってから「身につけておいてよかった」「身につけておけばよかった」(または「今のうちにしておいたほうがいいですよ」という学生へのアドバイス)を、それぞれ一つずつ挙げるとしたら、それは何でしょうか。(自由記述、複数回答可)

### 回答結果

「身につけておいてよかった」(表8)

内容	回答数
◎敬語・マナー	7
◎文章作成力	3
明るい返事、挨拶ができること(相手の目を見て)	3
読むこと(新聞、本)	2
年齢差を気にせず話せること	2
英語のコミュニケーション力	2
◎対人コミュニケーション力	2
自分の立場と相手の立場をふまえた対応(言葉遣い、ふるまい、気遣い)	2
第一印象をよくするコミュニケーション能力	1
◎正しい言葉遣い	1
基本的な礼儀	1
目標を達成する力	1
◎最低限の知識	1
正しい姿勢	1
パソコンスキル	1
◎聞く力	1
◎文章読解力	1
人前で話す力	1
無回答	4

「身につけておけばよかった」(表9)

内容	回答数
(テレビ、スマホだけでなく)本、新聞を読む	4
英語の力	3
幅広い年齢層の方とのコミュニケーション	3
◎語彙力	2
◎敬語の正しい使いかた	2
◎わかりやすい言葉に言い換える力	1
◎類語	1
カタカナ言葉	1
◎情報を整理し、簡潔に文章にまとめられるだけの語彙力	1
情報収集力	1
◎整理する力	1
話すことそのものではできたが、知識、見聞が少なく満足いく内容のコミュニケーションをとることができなかった	1
自分の興味あることはもちろん、それ以外にも幅広く見聞きしておけば、もっと円滑なコミュニケーションが取れたと思う	1
情報を活用する力	1
◎傾聴の力	1
◎活字を読むこと	1
ファイナンシャルの知識(MBAホルダー)	1
スケジュールの優先順位づけ	1
ビジネス用語	1
交渉や商談における強いコミュニケーションスキル	1
計算力	1
無回答	1

これらは現場実践を数年ふまえたうえでの、社会人として生きた経験が反映されたものだろう。得られた回答のうち筆者の授業で扱っているものに◎印をつけてみた。すると「身につけておいてよかった」の上位には授業で扱う内容(「敬語・マナー」「文章作成力」)があるが、「身につけておけばよかった」には、筆者が授業で扱うようなものは上位はなく、より生活習慣的なことから(「(テレビ、スマホだけでなく)本、新聞を読む」「幅広い年齢層の方とのコミュニケーション」)が上位に挙がる結果となった。

授業で扱う内容は、学ぶ側がたとえ受け身であったとしても知識として習得することは可能だが、生活習慣といったものは個人の環境、また能動的な意思に依存する傾向がある。授業のように準備された習得用プログラム以外に、自ら生活のなかで身につけねばならないことが社会では必要となる、という



ことだろうか。

「今のうちにしておいたほうがいいですよ」という学生へのアドバイス (表10)

内容	回答数
明るい雰囲気づくり	2
自分から積極的に人と関わり、よく話し、挨拶してコミュニケーションをとること	1
学生として社会人と関わることに、社会人として関わることに違いを知っておくこと	1
◎社会人に求められる言葉の選び方や、基本の敬語レベルを知っておくこと	1
◎「すいません」(→「すみません」)などの、言葉の癖を治すこと	1
◎読み書きやその言葉の意味を幅広く知ること	1
話す内容とともに、話し方(しぐさや表情など)が重要であるということを知ること	1
声をもっと大きく出すこと(相手に聞こえるように)	1
パソコンスキル	1
自分主体ではなく相手主体の会話ができるようになること	1
無回答	3

「今のうちにしておいたほうがいい」という学生へのアドバイスは、日ごろ若者と接している年配者が切実に感じていることだろう。この結果のうち筆者の授業で扱う内容に◎印をつけてみたところ印は3つにとどまり、社会で共に働く仲間にも求められていることは「明るい雰囲気づくり」「自分から積極的に人と関わり、よく話し、挨拶してコミュニケーションをとること」「話す内容とともに、話し方(しぐさや表情など)が重要であるということを知ること」など、生活経験から学ぶ知恵への示唆が多くみられた。

#### IV. アンケート結果の考察

##### 1. 今後の授業への反映

今回の調査結果から確認できたことをあらためて整理すると以下ようになる。

- A. IT社会における現代でも、依然として対人コミュニケーションは社会生活における重要な要素である
- B. 社会人として働くうえで短期大学生に欠けていると思われる言語能力は以下の傾向にある
- 話す・聞く：「情報を整理し簡潔に述べる力」「言

い換える力」「TPOをわきまえた言葉を選び、使用する力」

読む・書く：「要約する力」「話し言葉と書き言葉を区別する力」「文字情報を的確に受け取り、処理する力」

C. 社会人として働くうえで特に重要なことは、B.に加えて以下のことが挙げられる

話す・聞く：「表情・姿勢・態度」

読む・書く：「自分で書いた文章を読み直し、訂正する力」

D. 言葉遣いで気になる点があった場合、実社会での注意のしかたには、a.その場で直接正すものと、b.間違えた本人自身に考えさせ、自ら気づくように促すというものがある

E. 社会人として働くためには当然知識も重要だが、さらに生活習慣や経験から習得することがらも大切である

今回得られた結果A.～E.を授業に生かすという視点から考察する。まずA.だが、授業スタイルでは近年アクティブ・ラーニングが推奨されるなど、主体的に考える力の育成に欠かせない要素として、対人コミュニケーションの重要性は既によく知られている。学習者が能動的に参加できる授業は筆者が特に目指すものであり、これまでも工夫してきたが、このことは今後も継続していきたい。

B.の「情報を整理し簡潔に述べる力」「言い換える力」「TPOをわきまえた言葉を選び、使用する力」や、「要約する力」「話し言葉と書き言葉を区別する力」「文字情報を的確に受け取り、処理する力」という項目は、すべて筆者が授業で扱っている内容である。今回の調査によって授業のどこに力点を置けば、将来に向けてより良い言語能力を育成できるかの目あてができたので、そこに注力し授業を行い、解説の方法や時間のかけ方などに工夫を重ねてゆくことを心がける。

C. 社会人として働くうえで特に重要なことは上記項目B.にプラスしてc.「表情・姿勢・態度」d.「自分で書いた文章を読み直し、訂正する力」という結果が出た。授業で扱うとなるとc.のように数値化されにくいものは困難が伴う。しかし、たとえばアクティブ・ラーニングの授業であれば、やりと

りのなかでその指導は可能になるだろう。「表情・姿勢・態度」で学習者に注意すべき点があれば対話形式のアクティブ・ラーニングだからこそ、その都度注意を促すことが可能である。学習者と授業者の間で対話がなされるため、講義形式の授業よりも「わざわざ、取り立てて」という雰囲気は少なくなり、学習者への精神的な配慮のうえでも指導がしやすいかもしれない。

d. はつまり「文章の推敲力」ということになるが、これは筆者の現状の授業では対応が十分でないため、今後の課題となる。自分の書いたものをいかに客観視し吟味できるかが問われることになるが、これには構成・文法・表現など総合的な言語能力が求められる。対策としてルーブリック<sup>4</sup>を使用した自己評価やピア・ラーニング<sup>5</sup>による相互評価などが考えられるが、いずれにしても学習者に合わせたかたちで行うことになるだろう。今後検討してゆきたいことの一つである。

D. 学生への注意のしかたという点で、示唆に富む回答結果である。間違いは「その場で」「すぐに」正されると、因果関係がわかりやすいため、注意された側は理解しやすい。しかし大勢の学生がいるなかで注意されたとなれば、精神面の負担は大きくなる。それが原因で学生はその教室に、ひいてはほかの教室にも行く気がなくなった、などという話も聞いたことがある。正しいことを押しつけるという、力で学生を抑えこむやり方ではなく、今回のアンケート回答にあった「自ら気づかせる」という注意のしかたは、今後積極的に授業に役立ててゆきたい。

E. あらためてこの項目の結果を振り返ると、「今のうちにしておいたほうがいい」という社会人から学生へのアドバイスには、「明るい雰囲気づくり」「自分から積極的に人と関わりよく話し挨拶してコミュニケーションをとること」「話す内容と

もに、話し方（しぐさや表情など）が重要であるということを知ること」「自分主体ではなく相手主体の会話ができるようになること」など、授業を工夫すれば学生に力をつけられる可能性があるという類の回答でないものが多かった。この結果が示唆していることは、社会に出てからは知識だけでは自分を支えきれない場合もある、ということだろう。知識も重要だが持っているその知識をいかに使うか、その判断の基準となるもの、心の基盤づくりが、実社会を主体的に生きるための「人格教育」として、社会から「学生のうちに身につけておいた方がいい」というアドバイスが多くあった、ということなのではないだろうか。

これまでみてきたアンケート回答のうち、B. C. は本学建学の精神の①職業教育に、そしてこのE. は②人格教育にかかわることであった。総合教養科目にかかわる筆者としては、項を改めてこのE. の問題を取りあげたい。

## 2. 短期大学に求められる教養

「知識と経験」、これは一見些末な問題のようだが、実はこのことは高等教育の、そして教養教育の重要な問題に触れているのではないだろうか。

「短期大学の今後の在り方について」（中央教育審議会大学分科会大学教育部会 短期大学ワーキンググループ2014年）の審議まとめにおいて、今後短期大学が「重点的に担っていくことがふさわしい」4点<sup>6</sup>のなかに「③知識基盤社会<sup>7</sup>に対応した教養的素養を有する人材の養成」（下線は引用者）がある。まさに「知識と経験」の問題であるが、この知識重視社会において短期大学に求められる教養教育とはどのようなことを具体的に考えればよいのだろうか。

藤本（2017）は「グローバル化時代の大学に求められる「教養」として、「感性と知識を合わせて育

<sup>4</sup> アメリカで開発された学修評価の基準の作成方法。「評価水準である「尺度」と、尺度を満たした場合の「特徴の記述」で構成される。記述により達成水準等が明確化されることにより、他の手段では困難な、パフォーマンス等の定性的な評価に向くとされ、評価者・被評価者の認識の共有、複数の評価者による評価の標準化等のメリットがある。」（2012年8月中央教育審議会答申「用語集」より）

<sup>5</sup> 仲間同士で小さなグループを作り、お互いの知識や情報をもとに協力し合って問題解決する学習活動。①課題を遂行することによる能力の向上②人との社会的な関係を築き視野を広げる、という2つの目的があるといわれる。

くむことこそが必要だ」と主張する。「外国語によるコミュニケーション能力」や「異文化理解力」などが、グローバル化時代に求められる「教養」とみなされることも少なくないが、そうした能力の育成だけでは学生に「地域社会や国といった中間的な政治的領域への関心」へ目を向けさせることはできないとし、「内閣府において提示された「グローバル人材」の三つの要素のうちの一つ「日本人としてのアイデンティティ」に注目」する。そして俳句を例に挙げ「古典」と「実践力」の関係を捉え直す。

ある石碑の言葉を説明するという課題が設定されたと仮定し、「学校教育で学んできた知識だけ」では現代語訳のみの表層的解釈になるが、日本の歴史や文化という背景を理解したうえで句の説明をしようとするれば人文学的な知のみならず日本の風土や気候に関する自然科学の知識も必要になる。また「初時雨」という季語を英訳して説明する際「時雨」を自動翻訳機にかけ、そこに「初」にあたる first をつければよいというものではなく、「知識」だけでなく、生活のなかで育まれる感性が必要になる」という<sup>8</sup>。「生活のなかで培われる季節感を身につけ、先に挙げたような学問的知識をもつことで、初めてこの句を訳し、説明することができるようになる」「そのような感性と結びついた知識でなければ「実践力」の基盤にはならないだろう」と述べる。観念的な知識でなく、「生活や文化に根差した学問」こそ、「グローバル化時代の大学に求められる「教養」に欠かせない、ということだろう。

これを本学建学の精神に重ねてみると、観念的な

“記号としての言葉”が使えることは実践力を重視する①職業教育において重要なことだがそれだけではなく、生活に根差した“生きた言葉”も合わせて使えるようになることが、質の高い職業人を養成するための②人格教育だということになるのではないだろうか。

### 3. 今後の方向性と課題

短期大学は、四年制大学と比較すると「基礎教育の時間が足りず、専門教育も1年しかない」というイメージを一般には持たれている。たしかに実際の授業数は少なく、全体の規模が小さいのは事実である。一方で、文科省のホームページなどには「短期の修業年数と低廉な学費負担」や、「職業又は実生活に必要な能力」の育成を目的とする高等教育機関として従来の学問体系にこだわらない学科を設置<sup>9</sup> しているということも、短期大学の特色として挙げられている。

本学で教育に携わる筆者も短期大学の特色は、短い年数のなか専門教育と教養教育がバランスよく配置されていることや、規模が小さいことにより教員が学生一人ひとりと顔の見える関係を築くことができ、きめの細かい少人数教育が可能になる、というところにあると思っている。学生の多様化が進むなか、必ずしも基礎学力が十分でない学生や経済的に厳しい状況にある学生の対応を考えると、ユニバーサル段階<sup>10</sup>における「きめ細やかな少人数教育」は、短期大学の強みといえるだろう。

また本学は女子短期大学であるが、これまで特に

<sup>8</sup> 中央教育審議会大学分科会大学教育部会 短期大学ワーキンググループが挙げる4点は以下のとおりである。①専門職業人材の養成（幼稚園教諭，保育士，看護師，栄養士，介護人材等の専門職業人材養成）②地域コミュニティの基盤となる人材の養成（金融，商業，ビジネススキル，情報，被服，芸術などの専門知識・技能と幅広い教養を併せ持つ地域コミュニティの基盤となる人材の養成）③知識基盤社会に対応した教養的素養を有する人材の養成（短期大学の特色を活かした教養教育と専門教育の提供による知識基盤社会に対応した人材の養成）④多様な生涯学習の機会の提供（資格取得やキャリアアップを目指す社会人の学び直しプログラムや地域のニーズに対応した生涯学習プログラムの実施）

<sup>9</sup> 中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像（答申）」2005年の用語解説によれば以下のとおりである。「英語の knowledge-based society に相当する語。論者によって定義付けは異なるが、一般的に、知識が社会・経済の発展を駆動する基本的な要素となる社会を指す。類義語として、知識社会、知識重視社会、知識主導型社会等がある。」

<sup>10</sup> 藤本（2017）は具体的に以下のように説明する。「『時雨』を the first winter shower と訳すためには、それが冬の雨を意味するということを知っているだけでは十分ではない。立冬を過ぎたあたりの寒さが身に染みはじめる頃に、しとしと降る雨がどういふものなのか。そうした感覚がなければ、この句を理解して説明することはできない。」（P.167）



女性への社会的ニーズが高い幼児教育や家政教育といった分野で職業人養成に実績をあげてきた短期大学は、現在もなお女性の高等教育進学・社会進出を支える役割を果たしているといえる。

これまでの考察から、女子短期大学において初年次教育を考える際にはこれらの特色をふまえ、また本学の建学の精神である①職業教育、②人格教育を主軸としたうえで、社会に直結する「実践力」と、その「実践力」を支える生活に根差した“生きた言葉”を合わせて育むことが、今後筆者が本学の総合教養科目で目指す言語教育の方向性であるということが明らかになった。

今後の課題は、観念的な知識ではない「生活や文化に根差した」“生きた言葉”というものを、どのように授業のなかで育んでいくのかということである。「生活」や「文化」という、個々の感性に頼った不可視なことがらを扱う際の授業構成、教材の工夫には困難を伴うことが予想される。特にこうした個人的な経験の質といったことを授業で取りあげる場合忘れてはならないことは、どのような経験も切り捨てられたり規格外とみなされたりすべきではなく、大切に扱われるべきものだということだろう。いうまでもなく学生はそれぞれ、生活環境や興味・関心が異なる個別的な存在である。こうした個別的背景からくる一人ひとりの体験を、二つとない、かけがえのないものとして扱うことによって自己肯定感も育まれてゆくのではないだろうか。目の前の学生とよく向き合いながら、試行錯誤を重ねつつ取り組んでゆきたい。

## おわりに

社会人から「学生のうちに身につけておいた方がいい」というアドバイスで多かった、アンケート結果E.の「知識と経験」に触れた回答は、「量と質」の問題ともいえる。たとえば「量」は“記号として

の言葉”であり“知識”“情報”であり“いつでも、だれにでも、均一の価値”を示すものと表現することができる。一方「質」は“生きた言葉”であり“経験”“意味”であり“その人がその人であること”、“かけがえのないこと”となるだろう。

情報化社会のこの世の中で、私たちはとかく「量」の世界に振り回されることが多い。「量」は多いほうがよく、それは豊かで得なことだという捉え方である。現代社会において「量」は当然必要なことで、これがなければおそらく生活は成り立たないだろう。

しかし「量」だけでなく、「質」の世界のことも忘れず生きてゆくことができたなら、より深みのある社会生活が送れるということを、今回のアンケート結果では示してくれているのかもしれない。

## 引用・参考文献

- ・ 荻谷剛彦（2012）『アメリカの大学・ニッポンの大学』中公新書ラクレ
- ・ 荻谷剛彦（2012）『イギリスの大学・ニッポンの大学』中公新書ラクレ
- ・ 中央教育審議会大学分科会大学教育部会（2014）短期大学ワーキンググループ「短期大学の今後の在り方について（審議まとめ）」文部科学省ホームページ  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1351962.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1351962.htm)（2018.1.5 最終閲覧）
- ・ 中央教育審議会（2005）「我が国の高等教育の将来像（答申）」文部科学省ホームページ  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm)（2018.1.5 最終閲覧）
- ・ 広田照幸、石川健治、橋本伸也、山口二郎（2016）『学問の自由と大学の危機』岩波書店
- ・ 藤本夕衣（2017）「グローバル化時代の大学に求められる「教養」とは？」－日本の「古典」に根差した「実践力」－藤本夕衣・古川雄嗣・渡邊浩

<sup>9</sup> 中央教育審議会大学分科会大学教育部会短期大学ワーキンググループ「短期大学の今後の在り方について（審議まとめ）」（2014）より

<sup>10</sup> 中央教育審議会「21世紀日本の高等教育の将来構想（グランドデザイン）審議の概要（案）」（2004年）によれば以下のとおりである。「アメリカの社会学者マーチン・トロウは、高等教育への進学率が15%を超えると、高等教育はエリート段階からマス段階へ移行するとし、さらに、進学率が50%を超える高等教育をユニバーサル段階と呼んでいる」

一編『反「大学改革」論』ナカニシヤ出版153-170

頁

- 吉見俊哉（2012）『大学とは何か』岩波書店